

体育科・保健体育科の授業における教師の働きかけ ー授業場面で用いられる教師の言葉とオノマトペー

指導主事 山本 秀和

I 研究の趣旨

言語は論理的思考力の基盤であるだけでなく、コミュニケーションや感性の基盤でもある。また、豊かな心をはぐくむ上でも、言語に関する能力を高めていくことが求められている。(図1)

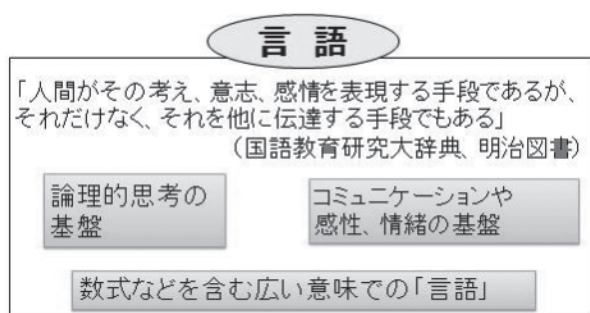


図1 言語に関するとらえ

平成23年度から小学校において完全実施の運びとなる新学習指導要領において、「言語活動の充実」は、各教科等を貫く改善の視点である。体育科においては、運動を通じた学びの側面とともに、体力の向上を図る視点がある。ここで問題になってくるのは、「言語活動の充実」と「体力の向上」という二つの相反する活動を考えていかなければならないということである。

ところで、小学校新学習指導要領総則編では、言語環境の整備について以下のように述べている。

- ① 教師は正しい言語で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書くこと。
- ② 校内の掲示板やポスター、児童に配布する印刷物において用語や文字を適正に使用すること。
- ③ 校内放送において、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話すこと。
- ④ 適切な話し言葉や文字が用いられている教材を使用すること。

⑤ 教師と児童，児童相互の話し言葉が適切に行われるような状況をつくること。

⑥ 児童が集団の中で安心して話ができるような教師と児童，児童相互の好ましい人間関係を築くことなどに留意する必要がある。

～中略～

また、小学校段階では、教師の話し言葉などが児童の言語活動に与える影響が大きいため、それを適切にするよう留意することが大切である。

小学校学習指導要領解説総則編より一部抜粋

正しい言語や適切な言葉を用いること、好ましい人間関係を築く視点などである。

そこで本研究では、体育科における言語活動の充実の視点を明らかにしていく。また、言語環境の整備に伴い、教師の言語による働きかけが子どもの意識とどのように結び付いているのかを、小学校における具体的な授業場面をもとに考察していく。さらに、教師の言語による働きかけの中でも、「スポーツオノマトペ」の分析を行うことにより、あまり意識せずに話していると思われる教師の「言語」についても考察していく。

- ① 体育科における言語活動の充実
- ② 教師の働きかけと子どもの形成的授業評価
- ③ スポーツオノマトペの分析

II 研究の内容と実際

1 体育科における言語活動の充実

(1) 言語力育成会議，中教審答申，新学習指導要領，各種資料等の分析

まずは、2006年から2007年にかけて開催された言

語力育成会議の内容から確認をしていく。様々な方面の有識者が集い、今後の日本語の在り方について話し合った言語力育成会議における体育・保健体育科にかかわる内容は下記のとおりである。

- ① 保健体育科における言語力育成に関しては、身体を動かすことの効能など指導内容を工夫することが大切である。
- ② 体育は身体だけに焦点が当てられる傾向があるが、理性と感性、思考と行動が統合的に機能するという意味でコミュニケーション能力やモラルの育成にも貢献するものである。
- ③ 他者とのコミュニケーション能力を育成するため、ダンスなどの身体表現や、ゲーム場面での意思疎通などの集団的活動で互いに励まし合ったり、相手チームの健闘を称えたりして、協力して学び合う活動が求められる。
- ④ 論理的思考力を育成するため、筋道を立てて練習や作戦を考え、その結果を客観的に評価し、必要な修正を図るなどの活動を重視することが考えられる。

言語力育成会議（2007）資料より一部要約

ここでは、体育科の授業においてはぐくまれる言語力について述べられており、それぞれの項目では、体育科の目標や言語活動の充実の視点についての記述がうかがえる。

これを受けて、中教審答申では、以下のように、体育科における言語活動の充実を定義している。

グループ、ペアなどでのかかわり合い、課題の設定や振り返りまとめる、作戦を立てる、話し合うなど、伝え合ったり表現し合ったりする場面がある。それを意図的に行い授業を充実させていくことが言語活動の充実になる。 **中教審答申（2007）資料より一部抜粋**

ここでは、体育科においても話し合う、伝え合

う、表現し合うなどの言語活動を、意図的に行い授業を充実させることが肝要であることが述べられている。

また、言語活動の充実に加えて、体力についても中教審答申では記載が見られる。新学習指導要領につながる体力のとらえ方として、中教審答申では、以下のように述べている。

※ 体力のとらえ方

体力は人間の活動の源であり、健康の維持のほか、意欲や気力といった精神面の充実に大きくかかわっており、「生きる力」の重要な要素である。子どもたちの体力の低下は、将来的に国民全体の体力の低下につながり、社会全体の活力や文化を支える力が失われることにもなりかねない。

中教審答申（2007）資料より一部抜粋

さらに、新学習指導要領における体育科の目標は以下のとおりである。

心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。 **小学校学習指導要領解説体育編より**

福島県教育委員会でも、言語活動の充実に関しては、実践事例集の刊行や学校教育指導の重点に「言語活動の充実」のポイントを掲載している。体育科の目標を達成させるための「手段としての言語活動」の充実である。しかし、ここで考えていかなければならないのが体力の向上である。児童の体力の低下傾向は顕著であり、背景には次のようなことが考えられる。

- ・ 遊びを含む運動をする時間の減少
- ・ 便利な生活に慣れた結果の生活習慣の中での運動の減少

- ・ 運動をする子どもとしない子どものはっきりとした二極化
- ・ 運動を伴った学校行事の減少
- ・ 精神面における我慢や遂行力の不足

運動身体づくりプログラム〈小学校編〉解説
(平成18年)より

このような現状を受けて、福島県教育委員会では、体力の向上に関して、「子どもの体力向上支援委員会」を開催し、学校体育だけでなく、食育や特別支援教育など多方面から子どもの体力向上について考えてきている。福島県内で実施されている運動身体づくりプログラムの実施もその一つである。

体育科においては、言語活動の充実の視点を誤ると、運動時間の減少が起こる可能性がある。「作戦タイムを長くとり」「学習カードに詳細に記載する」といった体育科ならではの言語活動を充実させると、体育科の特性である「運動」の時間が短くなるというジレンマを抱えることになる。現代社会を生きる子どもたちにとって運動時間の減少は、体力の低下につながり、中教審における体力のとらえ方である「社会全体の活力や文化を支える力が失われることにもなりかねない」といった状況に陥ってしまう危険性がある。

体育科においてはぐくみたい資質や能力は「技能」「態度」「思考・判断」である。この三つの資質や能力をはぐくむためには、授業場面における「励まし合い」「認め合い」「教え合い」といった言語活動は不可欠である。「体力の向上」と「言語活動の充実」の二つの命題を同時に解決していくためには、運動時間の十分な確保をしつつ、体育科における言語活動の質の向上をどのように図ればよいのか、考えていく必要がある。

(2) 体育科における「論理的思考力」「コミュニケーション」「感性」について

ここまで考えてきたように、言語活動の基盤は、「論理的思考力」「コミュニケーション」「感性」である。また、体育科ではぐくみたい資質や能力は「技能」「態度」「思考・判断」である。図2は両者の関係を教師側の働きかけの視点でまとめたもので

ある。

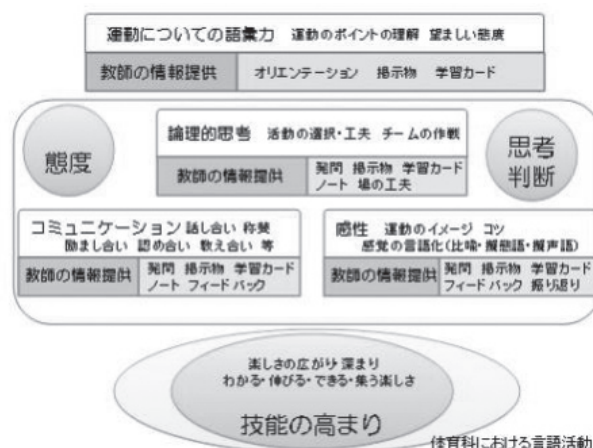


図2 体育科における言語活動

言語は、体育科においても知識や技能を習得するとき、また、その知識や技能を活用したり、課題解決に向けて考えたり、判断したりするときにも欠かせないものである。「励まし合い、認め合い、教え合い」などの子ども同士のかかわり合いや、運動の(動き)のイメージやポイントを伝え合うときにも、それらを言葉で表現することが重要である。

実際の授業では、教師からの働きかけと子ども同士の言語活動の場面が考えられる。教師からの働きかけとしては、発問や掲示物、視聴覚機器、示範等を用い、運動のイメージを分かりやすい言語にして子どもたちに伝えていくことが考えられる。また、子ども同士の言語活動の場面では、作戦を伝え合う際、教師からの働きかけをもとに、自分の感覚や動きに対するイメージを言語化し、運動(動き)のイメージやポイントを友だちに伝えていくことが考えられる。

このような活動がもとになり、言語によって「思考・判断」「コミュニケーションの能力」「運動に対する感性」等をはぐくむことができると考える。

ここでは特に、教師からの言葉による働きかけについて考えていきたい。子ども同士の言語活動を活性化させるためには、運動(動き)のイメージを的確に伝えなければならない。教師のイメージと子どものイメージのずれを埋めていくのが言語である。そして、このことが運動の技能の高まり、運動の楽しさの広がり・深まりにつながっていくと考える。

体育科において言語活動を充実することは、単に
 作戦タイムを長くとか学習カードに本時の学び
 や感想を詳細に記述するといった量的な問題ではな
 い。言語活動を手段として、子ども一人一人の運動・
 動きの質の向上（態度や思考・判断を含む）をめざ
 して行われていくことが重要である。

(3) 高まり合う集団と言語活動

学級集団における言語活動は、教師からの働きか
 けとともに、友だちの動きの観察や友だちからの言
 葉かけなどがある。これは、一人一人の資質や能力
 の向上に大きく左右していく。こうした言語活動の
 充実のためには、学習グループや学級の中の人間関
 係が好ましい状況にある必要がある。好ましい人間
 関係とは、お互いが信頼し合って、それぞれの子ど
 もの態度や発言を学級全体が受容・共感できる状態
 にあることである。もちろん、好ましい人間関係を
 築いていくことは、すべての教育活動において取り
 組むべきことである。

体育科の授業の中で、子ども同士で行われる言語
 活動については、以下のような言葉かけが考えられ
 る（図3）。

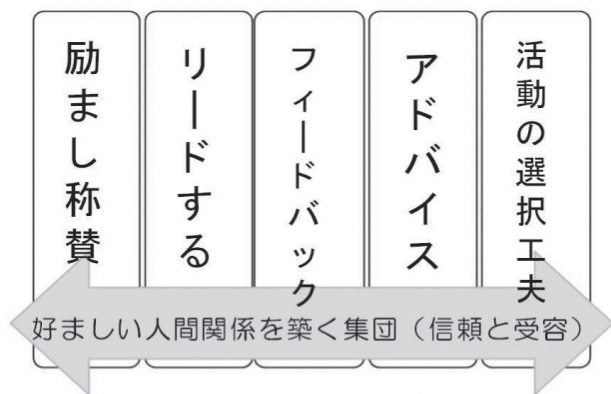


図3 好ましい人間関係を築く集団

子ども同士が、このような肯定的な言葉かけを行
 うことにより、好ましい人間関係が築かれていくと
 考えられる。

また、その言葉かけが行われる場面としては、次
 のような学習場面がある。

- オリエンテーションの場面
- グループで作戦を立てる場面
- 学習活動を選ぶ・工夫する場面

- 振り返りの場面
- 励まし合う・認め合う・教え合う場面

「技能」「態度」「思考・判断」といった体育科の
 目標を達成させるためには、指導内容を子どもたち
 に習得させることが重要である。しかし、習得させ
 るために、機械的なトレーニングやドリル的な練習
 を重点的に行い、運動したいという意欲を失った活
 動になることは好ましくない。学習意欲の涵養は、
 学力の大切な要素の一つであり、このことは、体育
 科の目標は「技能」の習得だけでなく、活動の方法
 を選んだり工夫したりする「思考・判断」と活動に
 対する意欲や協力・安全等の「態度」も含まれてい
 ることから分かる。したがって、学習を進めると
 きには、教師と子どもたちとの双方向的な言葉のや
 りとりの中で、課題を見つけ、共に解決していくと
 いう流れで進めていくことが大切である。

また、子ども同士のコミュニケーションも大切な
 要素である。例えば、校庭での授業で、場が広がり、
 教師の目が届きにくい状況で授業を行うことになっ
 たとき、子どもたちの中で、学習の方向性が理解で
 きていないと、漫然とゲームを続けたり、トラブル
 が多くなったりすることがある。そのようなときには、
 子ども同士が励まし合ったり、認め合ったり、
 教え合ったりする状況が生まれるような課題を設定
 しておく。このことで、協力性がはぐくまれ、思考
 の幅が広まり、活動自体の有効性を判断したり、よ
 り発展的な場を工夫したりすることができる。

教師や友だちから肯定的な言葉をかけてもらった
 子どもは、活動への意欲が高まることで、他の友だ
 ちへの称賛や有効な助言に結び付いていくことが期
 待できる。しかし、「励まし合い・認め合い・教え
 合い」といった子ども同士の言語活動の充実と相反
 するように、運動自体の時間を確保できなくなっ
 てしまうことは避けなければならないと考える。

体育科における言語は、知識・技能の習得及びそ
 の活用、さらに課題解決する際の思考・判断に欠か
 せないものである。子ども同士の言語活動の充実の
 ためには、教師からの適切な働きかけとともに、好
 ましい人間関係を築く視点を忘れてはならない。

2 教師の働きかけと子どもの形成的授業評価について

ここでは、体育科における言語活動の充実の視点から、教師側の働きかけ（言葉かけ）と子どもの意識（形成的授業評価）についてのそれぞれの分析を試みる。また、具体的な授業場面をもとにそれぞれの関連についても考察していく。

(1) 子どもの形成的授業評価

平成16年5月、F小学校第4学年の「器械運動」（全5時間）の授業を対象として、授業後にアンケートを行った（図4）。グラフは1時間目から5時間目まで、それぞれの時間のアンケート結果の平均値をとってまとめたものである（図5）。

今日の体育授業で感じたこと	
1 ふかく心に残ることや感動することがありましたか(成果)	3-2-1
2 今まで出来なかったことが出来るようになりましたか(成果)	3-2-1
3 「わかった」「そうか」と思ったことがありましたか(成果)	3-2-1
4 精一杯、全力で運動することができましたか(関心・意欲)	3-2-1
5 楽しかったですか(関心・意欲)	3-2-1
6 自分から進んで学習することができましたか(学び方)	3-2-1
7 自分のめあてに向かって何回も練習できましたか(学び方)	3-2-1
8 友達と協力して、仲良く学習できましたか(協力)	3-2-1
9 友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか(協力)	3-2-1

図4 アンケート項目

図4のアンケート項目を総合してまとめたのが、図5のグラフである。

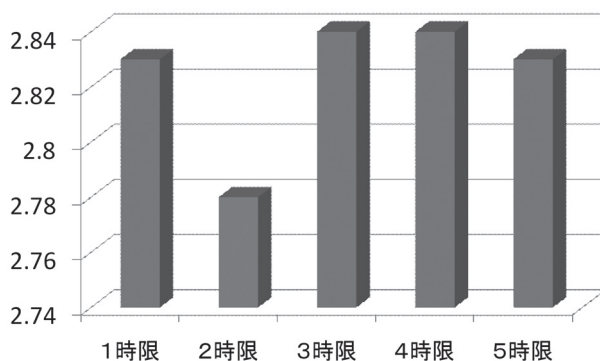


図5 アンケート結果

これまでの先行研究において、よい体育科の授業とされる授業では、子どもの形成的授業評価の値が、授業が進むにつれて上がっていきとされている。F小学校4年生の体育科の授業で考えると、授業が進むにつれての数値の上昇は見られない。これは、「よ

い体育科の授業」ではなかったと判断できる。

しかし、2時間目を除いて、3点満点で2.8を超えている。形成的授業評価では、この値は非常に高い数値である。このことから考えると、子どもたちにとって「よい体育科の授業」であったと言える。この相反する結果については、以下の要素があったと考えられる。

- ① 1時間目のオリエンテーションにおいてレディネステストを行い、自分でできそうな技を選定した。
- ② 実際にその技を行ってみて、難易度の高さを感じ、学び方の修正を行わざるを得ない状況にあった。
- ③ 3時間目には、難易度にあった技を選択し、学び方も自分たちに合った形で行えるようになってきた。そのため、数値が伸びていると考えられる。
- ④ 2時間目の反省を生かして、教師が学習の方向性の修正を図った。

このような観点で、授業実施後の形成的授業評価を行い、分析をすることにより、授業の内容を客観的に評価し、次時への改善につながるものとする。大切なことは、1時間1時間の授業の組み立てはもちろんのこと、単元を通してどのような子どもの姿にしていきたいかを考えることであろう。

(2) 教師の働きかけの分析

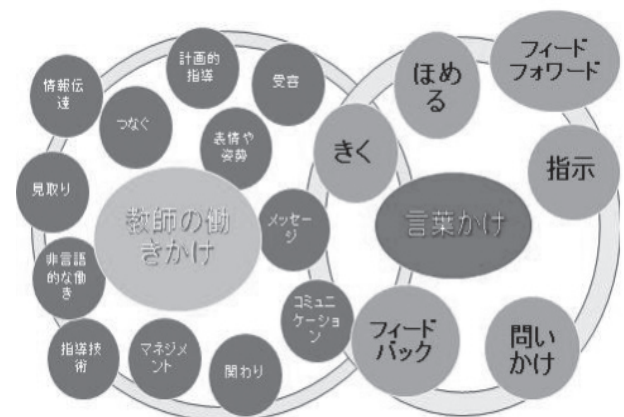


図6 教師の働きかけと言葉かけの種類

教師の働きかけは、図6のように分類することができる。「受容・情報伝達・つなぐ・マネジメント」など、体育科の授業における教師の働きかけは様々である。その中で、「言葉かけ」に着目していくと、「フィードバック・指示・問いかけ」などのカテゴリーが浮かび上がる。本研究では、教師の働きかけの中でも、言語活動の充実の視点の一環である「言葉かけ」に着目していく。

様々な種類の教師の言葉かけを観察カテゴリーごとに分類したのが図7である。教師が発する一言一言を分類すると大きく分けて10項目、さらに細かく分類すると27項目となる。

相互作用行動の観察カテゴリー	
Aフィードバック	①肯定的(技能的、認知的、行動的) ②矯正(技能的、認知的、行動的) ③否定的(技能的、認知的、行動的)
B励まし	①技能的 ②認知的 ③行動的
C発問	①回顧的 ②認知的 ③行動的
D受理	①傾聴 ②回答 ③受理・活用
E演示	
F説明	①学習目標 ②学習内容 ③学習方法(組織化)
G指示	①指示 ②合図
H補助的相互作用	
I維持管理	
Jその他	

図7 教師の言葉かけの分類

また図8は、本時のめあてをとらえる場面における教師の言葉かけと子どもの反応をまとめたものである。すべての働きかけを記載できないので、一部を抜粋とする。ここでは、相互作用の観察カテゴリーごとに教師の発言が分類されている。例えば、「楽しく練習するってどういうことかな?」の教師の発言は、C②(発問:認知的)と分類されている。

授業中における教師の言葉かけについては、VTR及びICレコーダーで収録し、記録を分析した。先行研究から考えると、この観察方法は、授業場면을「一般的内容場面」と「体育的内容場面」に分けて観察記録することになっている。本研究では、簡便化を図る意図から二つの場を一まとめにして観察記録した。

従来の方法は、3秒単位で記録する方法をとっていたが、時間単位で記録するよりも、教師が働きか

けた上で発生する「イベント」が生じるごとにカウントするほうが事実在即していると判断したため、イベント記録法を採用した。

しかし、ここで注意しなければならないのは、教師のすべての発言の記録を、そのまま観察カテゴリーに当てはめることは、適切ではないということである。例えば「もう少し」と声をかけたときに、(A)フィードバック①矯正(技能的)、あるいは、(B)励まし①(技能的)ともとらえることができ、その発言だけで的確に判断することができない。

そこで、授業者、想定児、全体を毎時間4台のビデオカメラで収録したVTRから、教師の表情、状況設定などを把握した上で、その働きかけがどのような意味なのかを判断した。

本時の学習と前時の学習をつなぐ場面	<p>○あのね、この間皆さんに書いてもらったの、完璧見ておいたんです。そしたらね、面白いことが書いてあった。面白いことが書いてあった。</p> <p>○それは、だれでしょう?という。</p> <p>○前回りをやりたい、後ろに回るのをやりたい、横に回るのをやりたい。みんなに球ののをやりたい。みんなお話をでてきたんだけど、一人おこういう人がいたの。</p> <p>○変な人?変な人じゃないよ。</p> <p>○まあ、誰かなあと言うと、自分のどこか分かる。</p> <p>○あっ、しまった先生が見失ってしまいました。あれっ、だれだったんだっけな。</p> <p>○後ろ回りの人の中で、後ろ回りの人の中で、もう完璧って書いてる人がいたんだ。上手にできるよ、僕完璧だ、という人がいた。</p> <p>○あれっ。</p> <p>○Dちゃんじゃない、Dちゃんもやりたいけど書いてある、あった。</p> <p>○で、本当に完璧なのかな?というのを今日は試していてもいい。</p>	<p>C①</p> <p>C①</p> <p>C①</p> <p>D②</p> <p>C①</p> <p>J</p> <p>C①</p> <p>J</p> <p>C①</p> <p>C①</p>	<p>○変な人?</p> <p>○分かった。○分らない。○あった。</p> <p>○Dちゃんじゃない。</p>
本時のめあてをとらえる。 めあて自分で決めた技を楽しく練習しよう。	<p>○となると、今日のめあては。</p> <p>○絶対、完璧?いいか、いくぞ、めあて書いていくから見て下さいね。</p> <p>○(めあてを書きながら)自分で・技を・どうする?</p> <p>○鍛えよう。鍛えていいの?</p> <p>○試そう。なるほど、試そうもいいな。こうしたいんだ、先生ちょっと。</p> <p>○どうする。</p> <p>○少し、漢字使おうかな。</p> <p>○それで、一つさ。息だんだん整ってきた?</p> <p>○今日ひとつね、ここね、みなさんに聞きたいことがあるの。先生、今回こういう言葉を入れました。</p> <p>○楽しく練習するってどういうことかな?</p>	<p>F①</p> <p>D③</p> <p>C②</p> <p>D③</p> <p>D③</p> <p>J</p> <p>C④</p> <p>H</p> <p>C②</p>	<p>○絶対、完璧?</p> <p>○(子どもたちの先生が書いているのを読みながら見ている。)</p> <p>○鍛えよう。</p> <p>○だめ。○試そう。</p> <p>○身につけよう。</p> <p>○練習しよう。</p>

図8 教師の言葉かけと子どもの反応

本調査において、教師の言葉かけを対象別に分類した結果が図9のグラフである。

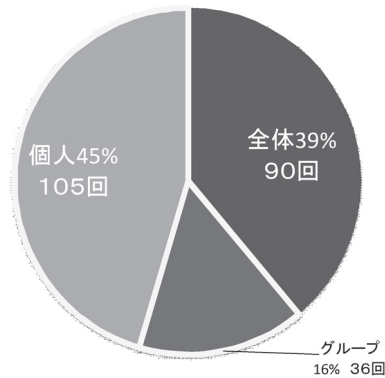


図9 教師の言葉かけ（対象による分類）

この結果についての考察は下記のとおりである。

- 全体に向けての働きかけが90回（39%）、グループ、個人に向けての働きかけが合計141回（61%）となり、個人に対する働きかけの回数が非常に多い。
- 個に応じた指導を充実させ、クラス全員に目を向けたいという教師の意図がうかがえる。

また、教師の言葉かけを内容により分類した結果は、図10のグラフのようになる。

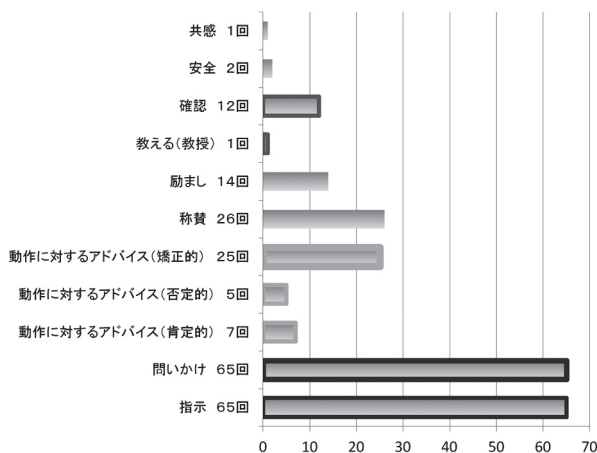


図10 教師の言葉かけ（内容による分類）

この結果についての考察は下記のとおりである。

- 指示と問いかけを合わせて56%、教える・確認を合わせて5%となっている。教える・

確認よりも問いかけが優先しているのは、本単元の学習指導案の内容をもとに考えると、子どもたちに気付かせたり、考えさせたりして達成感や成就感を持たせようとしていると考えられる。本授業では、子どもの形成的授業分析からも「やる気」が持続していたことがうかがえるが、この達成感や成就感が最も起因していると考えられる。

- 動作に関するアドバイスでは、矯正的なアドバイスの割合が高い。これは、準備運動や運動身体プログラムを行っているときに発せられていることが多い。体力を高めるために（動きたいときに動けるからだをつくるために）、日々継続している部分についてのアドバイスであると思われる。

教師の言葉かけが多いほど、子どものやる気を高めることができると安易に考えがちであるが、データからは違った結果が出ている。また、小学生に対しての「効果的な言葉かけ＝励ましや称賛」だけではないことも明らかになった。

状況に応じて、子どもたちにやる気を持たせるためには、「つま先の位置はどうする？」や「絵図と実際の違いは？」のような、認知的な発問を行った上で「待つ」という支援も必要であり、これからの体育科の授業においては、更なる効果的な発問の工夫も考えていかなければならない。

(3) 教師の働きかけと子どもの形成的授業評価との関連分析

ここでは、(1)子どもの形成的授業評価と(2)教師の働きかけの相関から見えてくるものを考察していく。特に、代表的な言葉かけであるフィードバックについて考えていきたい。

教師側が話したフィードバックの代表的な例は以下のとおりである。

- 肯定的フィードバックの代表的な例
「いい感じ」「できてるよ」「すごい」
- 矯正的フィードバックの代表的な例
「こうしなさい」「もっとこうして」

- 否定的フィードバックの代表的な例
「だめ」「そうじゃない」「違う」など

また、子どもの形成的授業評価と教師のフィードバックの相関を係数で表したものが図11である。

総合		肯定的フィードバック			矯正的フィードバック			否定的フィードバック		
		技術的	認知的	行動的	技術的	認知的	行動的	技術的	認知的	行動的
成果	結果	0.569	0.789	0.512	0.541	0.026	0.978	-0.564	-0.126	0.776
	感動体験	0.595	0.856	0.758	0.726	-0.192	0.555	-0.564	-0.126	0.776
	技能の伸び	0.049	0.152	-0.311	0.179	0.213	-0.631	-0.921	0.138	0.729
	新しい発見	0.611	0.471	0.776	-0.39	0.157	0.534	0.436	-0.267	0
意欲・関心	精一杯の運動	0.607	0.746	0.801	0.151	0.348	0.514	-0.373	0.086	0.75
	楽しさの体験	-0.101	0.114	-0.49	-0.235	0.469	-0.789	-0.692	0.25	0.511
学び方	自主的学習	0.592	0.723	0.947	0.244	0.096	0.827	-0.015	-0.039	0.438
	めあて学習	-0.511	-0.606	-0.895	-0.363	0.302	-0.925	-0.294	0.262	-0.054
協力	互みよ学習	-0.26	-0.325	-0.730	-0.220	0.222	-0.945	-0.542	0.118	0.222
	協力	-0.772	-0.886	-0.979	-0.449	0.302	-0.748	0.086	0.385	-0.493
		-0.833	-0.914	-0.981	-0.28	0.194	-0.64	0.168	0.333	-0.555
		-0.779	-0.65	-0.868	0.194	0.127	-0.542	-0.359	0.51	-0.049
		-0.712	-0.899	-0.906	-0.49	0.062	-0.641	0.387	0.158	-0.715

図11 形成的授業評価とフィードバック

例えば、図11の中の矢印にあるように、否定的フィードバック（行動的）と学習の成果の相関係数は0.978である。相関係数は絶対値1に近いほど相関があると考えられ、数値がプラスであることから、両者の関係は、正の相関があると考えられる。

この中で、有意差が認められた項目は、下記のとおりである。

- ・ 「感動体験」では、認知面で肯定的なフィードバックが効果がある。
- ・ 「技能の伸び」では、技能面で否定すると逆効果である。行動面では、多少否定しても、効果は認められる。
- ・ 「新しい発見」では、行動面で、肯定したほうが効果がある。
- ・ 「精一杯の運動」では、ほめる・矯正すると効果が上がらない。
- ・ 「楽しさの体験」では、すべての面で肯定的な対応が効果がある。
- ・ 「自主的な学習」では、行動面で、教師がかかり過ぎると逆効果になる。
- ・ 「めあて学習」では、すべての面で肯定的な対応は逆効果になる。

以上の結果から効果的な教師の働きかけとして、次のようなことが明らかになった。

- 学習成果があったと子どもが感じる授業を行うためには、否定的フィードバックは避ける。多くの教師が試みているように、子どもに充実感・満足感を与えたいならば、否定的な言葉ではなく、肯定的に働きかけていくことが望ましい。
- 子どもの自主性を促すためには、行動面に関するフィードバックは最小限にする。教師側が、「あしなさい」「こうしなさい」と一方的に指示を出すのではなく、「待つ支援」が大切になってくる。
- 子どもは、励ましの言葉を多くかけられ過ぎると、自分はあまり一生懸命に活動していないと評価されていると感じることも明らかになった。これは、学級の雰囲気や授業の進捗、状況にもよると思われるが、「すごいね」「よかったね」「がんばったね」だけの言葉かけでは、子ども自身、何がよかったのかがはっきりとせず、達成感が味わえないためと考えられる。動きのどこがよかったのか、どうすればもっとよくなるのかを的確に伝えるなどの教師の働きかけが必要である。

ここまで述べてきた、教師の働きかけと子どもの形成的授業評価の分析により、見えてきたことは下記のとおりになる。

- ・ 言葉を多用しても、子どもがやる気を起こすとは限らない。
- ・ 「分かる」「できる」の一体化をめざす体育では、認知的な発問が不可欠である。
- ・ 子どもに思考を促したいのであるならば、授業中における教師の説明は、最小限にする。

つまり、これからの体育科の授業では、教師がどのような願いから、その働きかけをし、子どもの思いはどう変わり、学習成果はどのように上がったのかという教育的作用を追求していくことが大切であると言える。

3 スポーツオノマトペの分析について

ここでは、体育科の授業において、教師からの働きかけの際に用いられたいり、子ども同士の学び合いの際に用いられたいりする「スポーツオノマトペ」について考えていく。全国調査の結果や福島県の教員の使用状況調査により明らかになった点や、今後の使用に際して考えていかなければならない点についても考察を加えていきたい。

(1) スポーツオノマトペの定義

オノマトペとは、擬音語・擬声語を意味するフランス語である。擬音語は実際の音を真似た言葉であり、擬態語は視覚、触覚など聴覚以外の感覚印象を表した言葉である。すなわち、両者は五感による感覚印象を言葉で表現する言語活動である。東海大学の吉川氏は、体育科教育（2009年11月）の中で、運動・スポーツ領域で活用されている擬音語・擬態語をスポーツオノマトペと名付け全国調査を行っている。通常使われるオノマトペには、「びしょびしょ、ごろごろ、びりびり、ざあざあ、がんがん」などが挙げられる。これをスポーツ領域に限定すると、「ピタッ、バシッ、トントントン」などとなる。さらにこの動きを表現する言葉としてのスポーツオノマトペは次のように七つに分類される。

〈スポーツオノマトペの分類例〉

- **管理（否定的）**
モタモタ ボヤボヤ ガチガチ ダラダラ
ボロボロ バラバラ ハラハラ
- **管理（肯定的）**
ガンガン キビキビ キチン キリッ
ジャンジャン シャキッ グイグイ
- **パワー「動きの力の強さの程度を表す」**
バシッ ドオーン パーン ガツン
グッ バン
例) ボールをバシッと打つ。
- **スピード「動きの速さの程度を表す」**
サッ シュッ ガッ チョン パッ
スッ ピッ
例) ボールの下にサッと入る。
- **持続性「動きの持続時間の長短を表す」**

フワッ スーッ ポーン サーツ
ピョーン

例) ポーンとボールを上げる。

- **タイミング「動きの実行効果を最大にするための時間的調整を表す」**

ドンピシャ ピッ ドンッ ストン
ピタッ ポン

例) ピタッと合わせる。

- **リズム「動きの時系列的調整を表す」**

トントントン バタバタ トン・ト・トン
ポーンポーン ピョンピョン

例) トン・ト・トンと足を合わせる。

また、スポーツオノマトペ使用の利点と問題点は以下のとおりである。

スポーツオノマトペの使用によって

- 児童生徒が興味関心を持ち、熱心に活動するようになる
- 児童生徒の動きがよくなる
- 児童生徒に対してイメージをふくらませやすい
- 状況や雰囲気、指導者の気持ちを伝えやすい
- 動きやタイミング、パワーの強弱等が児童生徒にとって理解しやすい
- 内容を手短かに伝えやすく、短い言葉で集約できる
- 児童生徒にとって動きを感覚で覚えることができる
- 技術の質があいまいになり、分かりにくい
- 正確な意図が伝えられないときがある
- 具体的理論に欠ける
- 細かい部分の説明が雑になる
- 児童生徒が専門用語を覚えない
- 感情に流されやすい

(2) 全国調査の結果と子ども同士の使用状況

小中高等学校教員が授業中に使用しているスポーツオノマトペの全国調査（平成16年）の結果を見ると、図12のような結果になっている。

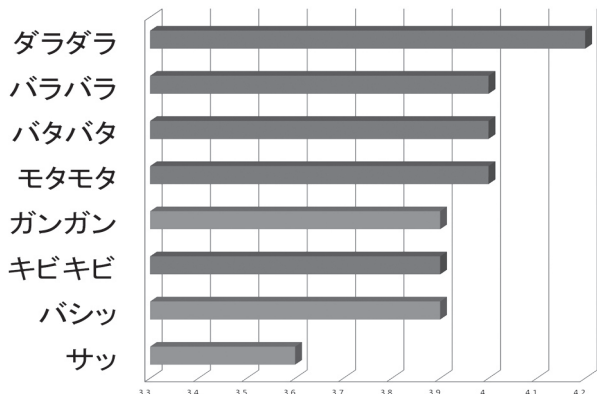


図12 スポーツオノマトペ全国調査

ここでは、「ダラダラするな」「モタモタするな」のように「～するな」という表現が多く出現する。これは「negative insutraction」として使用される管理のスポーツオノマトペの中でも、否定的な言葉である。このような表現は、技術指導というよりも選手の態度や構えを改善・促進する目的で使用されていることが多い。全国調査の結果は、図12のとおりである。7位と8位には「バシッ」や「サッ」などのパワーやスピードのスポーツオノマトペが出現してくる。

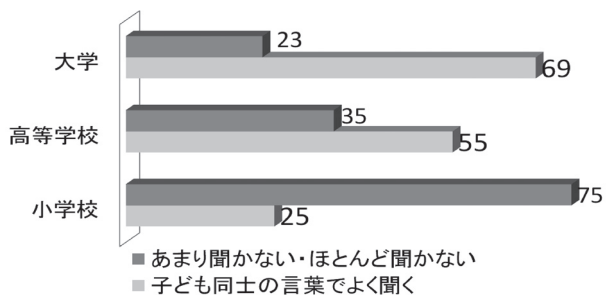


図13 スポーツオノマトペの子ども同士の使用状況

また、図13の子ども同士の使用状況を見てみると、校種が上がるにつれて、頻繁にスポーツオノマトペが使われていることが分かる。これは、年齢が上がるにつれて、運動（動き）に対するイメージが共有化されているためと思われる。例えば、同じ前転という運動をとっても、小学校段階では、手の付き方や身のこなし方など、それぞれが持つイメージは様々である。そのために、運動分解図を用いてイメージの共有を図っていると思われる。それが、校種が上がるにつれて、前転という運動の構造的な特性を共有できていることが、スポーツオノマトペを使用できる所以になっているものと思われる。また、

一つのスポーツオノマトペについても、その子どもの持つイメージは様々である。また、小学校での使用頻度が低いのは、語彙の不足により子ども同士のかかわりにおいて使用するのは難しいことも理由として考えられる。

(3) 福島県教育センターにおける研修者のスポーツオノマトペの使用状況調査と考察

平成22年度における、福島県教育センター基本研修（小学校、中学校、高等学校の体育・保健体育講座の初任者研修・経験者研修Ⅰ，経験者研修Ⅱの受講者），専門研修（体づくり運動講座，球技講座の参加者）において、スポーツオノマトペの使用状況を調査した。

本調査は「よく使う」から「あまり使わない」までの4件法で実施した。（有効回答数136名）

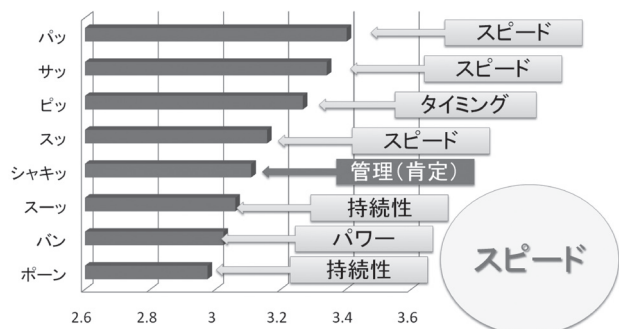


図14 小学校教諭（82名）の使用状況

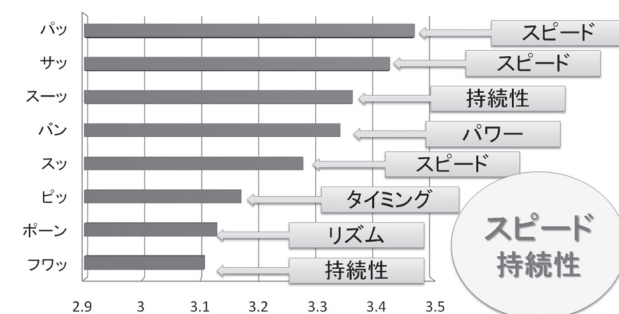


図15 中学校教諭（22名）の使用状況

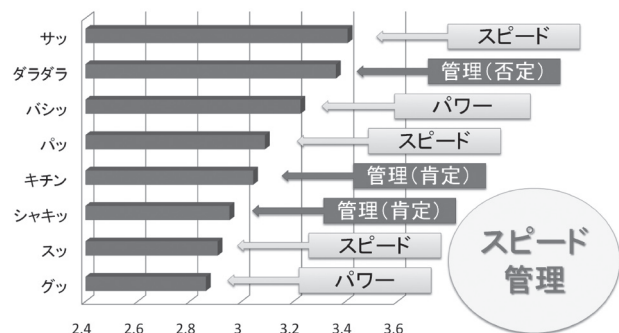


図16 小学校男性教諭（47名）の使用状況

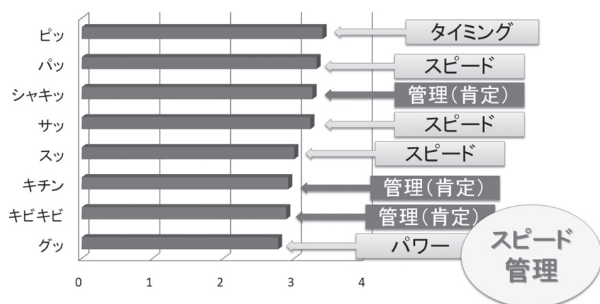


図17 小学校女性教諭 (35名) の使用状況

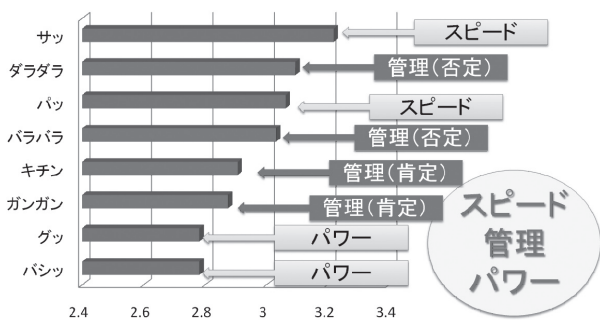


図18 高等学校教諭 (32名) の使用状況

福島県の教員の使用状況を見ると、パワーやスピードに関する使用頻度が高いことが分かる。スピードを表す「サッ」や「パッ」がどの校種においても高い使用頻度であった。また、negative instruction (否定的な指示) は校種が上がるにつれて増加している傾向が見られる。小学校では、使用頻度の低い「ダラダラ」が中学、高等学校においては、高い出現率となっている。

小学校では、positive instruction (肯定的な指示) やスピードやパワーに関するスポーツオノマトペを意識して使用している教師が多く見られる。しかし、小学生の理解力から考えると、言葉そのものでは難しい側面があり、小学校段階では、教師側のイメージと児童のイメージに開きがあるものと考えられる。

ここまで、スポーツオノマトペの全国調査・福島県における使用状況・文献研究をまとめ考察を図ってきた。そこから考えると、これからの教師の働きかけ(言葉かけ)には、次の3点が大切になってくるものと思われる。

- 1 オノマトペの理解力・表現力は年齢とともに発達する。技術指導(コツ)の言葉としてのスポーツオノマトペは、小学校では少なく

使用し、中・高等学校で徐々に増やすことが望まれる。また、小学生に対しては、動きに対するイメージが足りないため、スポーツオノマトペを使用する場合は、その言葉に適した示範をしながら用いると効果が上がる。

2 運動・スポーツに対する態度や構えを改善・促進するための管理的なスポーツオノマトペはnegative instructionではなくpositive instructionが望ましい。

3 オノマトペの使用時には、プラス面とマイナス面があることを自覚し、その場その場における臨機応変な対応を行うことができるように心がける。

(4) コミュニケーションの特性

授業の中で、教師側が運動のイメージを言葉で子どもに伝えようとするとき、なかなか伝わらない場面が見られる。また、器械運動などで運動分解図を用いて、それぞれの動きのポイントを構造的に把握し、子どもなりの言葉でまとめていくときにも、このような状況が見られる場合がある。

P.F.ドラッカーの研究によると、言葉による伝達手段については、図19のような特性が認められることが明らかになっている。

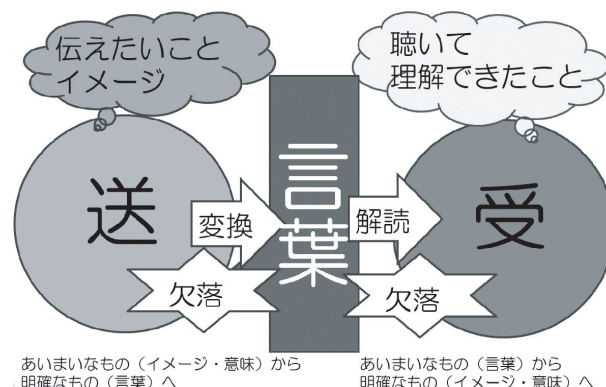


図19 言葉による伝達

図19から、受け手の言葉が成立を規定することが分かる。つまり、コミュニケーションは相手に知覚されてはじめて成立するということである。受け手のほうの意識としては、聞きたいことだけを聴くものであると言える。

コミュニケーション時の双方の段階として、まず、

送り手は、あいまいなもの（イメージ・意味）から明確なもの（言葉）へと変換する。次に、受け手は、あいまいなもの（言葉）から明確なもの（意味）へと変換する。ここで、それぞれの変換の際に、欠落が起こることが認められている。

このP・F・ドラッカーの理論を小学校段階の体育科の授業で考えてみると以下の点が考えられる。

- ・ 教師が持つ運動（動き）のイメージと子どもが持つイメージにずれがある場合、言葉による伝達には限界がある。
- ・ 子どもが「できるようにになりたい」「勝ちたい」という思いや願いを持たせることが、学習成立には欠かせないものである。
- ・ 言語による理解が成立するための発達段階を考慮しなければならない。その中で、実際の運動（動き）をイメージできるような視聴覚機器や示範を用いることは効果的である。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 体育科における言語活動の充実について

- 「言語活動の充実」が重視されている背景を理解するとともに、体育科における言語活動の意義を論理的思考力、コミュニケーション、感性の三つから考えることができた。
- 今回の研究を、今後は具体的な授業場面における、「励まし合い・認め合い・教え合い」といった実践的な研究につなげていきたい。

2 教師の働きかけと子どもの形成的授業評価について

- これからの体育科の授業では、教師がどのような願いから、その働きかけをし、子どもたちの思いはどう変わり、学習成果はどのように上がったのかという教育的作用を追求していくことが大切であることが分かった。
- ただ単に、「ほめる・称賛する」だけではなく、そこから派生していく認知的な発問とは、どのようなものであるかを考えていきたい。

3 スポーツオノマトペの分析について

- 全国調査との比較により、本県教員の使用に関しては、スピードやパワーに関する使用が多いことが分かった。小学校段階では、運動のコツや運動に対する構えについての使用が多く見られる。その際、negative instruction（否定的な指示）ではなくpositive instruction（肯定的な指示）のほうが効果が高いと言えることが分かった。体力向上の視点で考えていくと、動きづくりの手段として、結果としての体力が望めるような使用方法が望ましいことが分かった。
- 送り手（教師）と受け手（児童・生徒）のイメージの共有の方法や、効果的なスポーツオノマトペの活用について考えていきたい。さらに、子どもの使用状況や、使用する際の心理的な背景についても考察を加えていきたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 体育授業における教師行動に関する事例的研究 白土 勲著（福島大学大学院教育学研究科修士論文 2004年）
- 2) 子どもの感覚に響く「オノマトペ」 吉川政夫（体育科教育 2009年）
- 3) 子どもとともにカリキュラムを創り上げる体育科大単元構想 山本秀和 小川宏（福島大学教育実践センター研究紀要 2004年）
- 4) 教師の相互作用及びその表現の仕方が子どもの形成的授業評価に及ぼす影響 高橋、歌川、吉野、日野、深見、清水（スポーツ教育学研究 1996年）
- 5) 小学校・中学校学習指導要領解説体育編（文部科学省 2008, 2009年）
- 6) 言語力育成会議・中教審答申資料（2009年）
- 7) 体育授業を観察評価する 高橋健夫著（明和出版 2003年）
- 8) 福島県教育委員会 学校教育指導の重点(2009年)
- 9) 体育の見方、変えてみませんか 遠藤、加藤、滝沢、原田、森（学研 2009年）
- 10) 器械運動における有効なフィードバックの検討 高橋健夫著（スポーツ教育学研究 2003年）
- 11) マネジメント P.F.ドラッカー（ダイヤモンド社 2001年）
- 12) 初等教育資料2月号（文部科学省 2010年）
- 13) 体力向上プログラム開発・実践事業運動身体づくりプログラム小学校編（福島県教育委員会 2007年）